

誠愛 TIMES

広報誌

平成22年 秋号

医療法人社団 三光会

誠愛リハビリテーション病院

- ◆チーム医療に思う
- ◆託児所新築
- ◆韓国医療視察団来訪

◆サマーコンサート

チーム医療に思う ～脳神経外科医としての経験から～

横山信彦



脳神経外科医として医師生活をスタートして23年目になります。脳外科研修の最初は助手として手術に入る事でした。最初は何をやっていいか分からず、ちゃん

とアシストしろと術者に怒られていました。少し慣れてくると、役に立たなきやという思いに駆られて術野に手を出すのですが、今度は邪魔をするなど術者に叱られる始末。いったいどうしたらよいのかと途方に暮れていました。もう少し慣れて手術の流れや術者の手順が分かってくると、ちょっとずつ助手らしい事もできるようになりました。しかし、術者として手術に入るようになると、術者の術野は助手のそれとは全く違う世界として眼前に開けてくることに驚きました。また両肩に感じる責任感もそれまでとは雲泥の差です。助手としてついた手術を思い出しながら、あるいは手術書を読んで何度もシュミレーションを重ねて手術に臨んでも、決してスムーズに手が運ぶものではありません。まして途中で思ってもなかった出血が起こったりすると、もうパニックに陥ります。出血点がわからずまごついていると、助手についでくれた先輩がサッと血液を吸引して出血点を示してくれたり、「つぎは此处をこうして」と手順を指示されながら手を動かしたり、術者になった喜びよりも情けなさをひしひしと感じたものでした。器械出しの看護師さんがまごついている私の右手に器械をパンと手渡してくれて、次になすべき事を思い出した事もあります。手順のいい外回りの看護師さんは流れを見て的確なタイミングで器械のセッティングをしてくれます。次これが欲しいという

ときには、既に器械が準備されていて、術者の気分もずっと楽になりました。熟練の麻酔科の先生は最後の縫合が済んでシートをはずして間もなく患者さんが麻酔から覚めるよう調節して下さっていました。急患手術や人手が足りないときなどは、一人術者で助手もなく器械出しの看護師さんもなしで手術に入ったり、助手をしながら器械出しもしたり、時には麻酔医の役もこなさないといけませんでした。術者として手術の流れ、勘所がわかっていると、助手が手を出して欲しいタイミング、あるいは器械出しや外回りでなすべき事もわかります。手術室の中では手術に関わる誰もが患者のいのちを預かる術者を中心にスムーズに手術が進行するように、各々の持ち場でなすべき事をなすべき時にするというチーム医療が行われていました。

今はメスを持つ機会も殆どなくなりましたが、こうしたチーム医療のあり方は皮膚感覚として、脳外科医としてのアイデンティティーとして染みついているように思います。いま思えば、脳外科医としての修練の本質は、チーム医療を学ぶことであつたように思うのです。

私どもが携わるリハビリテーションもチーム医療です。術者不在の手術が成立しないように、最後に責任を背負うひとが明確でないリハビリテーションも成立しないと思います。豊富な知識、磨き抜かれた技術という縦糸に、「患者を何としても帰すべき場所に帰す」というハートの横糸が通らなければチームもまとまりませんし、質の高い医療という「綾をなす」ことはできないと考えます。医療者のハートという原点に返れば、自然にチームはできていくものと信じています。

(平成22年6月1日赴任：6病棟医長)

9月～12月の行事

9月20日 敬老の日
9月23日 秋分の日
10月11日 体育の日
10月29日 世界脳卒中デー

11月3日 文化の日
11月23日 勤労感謝の日
12月23日 天皇誕生日

託児所新築

子育て中の女性職員の多い当院では職員の子供たちを安全に預かり、職員が安心して働けるように院内託児所を平成10年より設けています。平成22年8月15日新託児所が完成しました。最先端のシックハウス対策を初め、断熱工法、床暖房を取り入れるなど、子供たちの快適な環境と健康に配慮した建物になっています。

心新たに保育士4名による家庭的な保育を行い、職員のワークライフバランスの推進の一助となりたいと考えています。
(文責：高見 愛)



プレイルーム



天窓とシーリングファン



子供用トイレ

サマーコンサート

平成22年7月21日 病院主催のサマーコンサートを開催致しました。大野城市在住の武田久美さん、櫻井さゆりさんのピアノの連弾と劇団道化による博多弁講座と‘にわか’を見せて頂きました。ピアノ演奏では「くるみ割り人形」や「ハンガリー舞曲」などの、耳馴染みの深い選曲で心豊かな気持ちになるサマーコンサートとなりました。劇団道化の方のお芝居では、思わず笑ってしまうことも……。コンサートに来場された患者さんも皆笑顔で、とても楽しい時間を過ごす事ができたと話されていました。
(文責：西千夏)



ピアノ演奏



博多にわか

韓国医療視察団の来訪

平成22年4月20日韓国の医療法人喜縁医療

財団 理事長の^{キムトジン}金徳鎮先生を団長とした医療視察団の総勢30名の皆さんが見学に来られました。金先生は昨年5月に大韓老人療養病院協会の会長に就任され、協会会員406ヶ所の療養病院を代表する立場になられたそうです。

当日は、当院よりが30分程度概要説明を行い、その後実際のリハビリ、看護等の現場を見学され最後に質疑応答を行いました。韓国でも2008年から介護保険制度が施行された事から鋭い質問・感想が数多く寄せられ、韓国の高齢者医療、介護を担う熱意を感じました。

(文責：今村洋一)



学会報告

～「心に残る演題賞」「大会奨励賞」に選ばれました～

霊峰富士が静かに見守る麓の地、静岡県三島市にて平成 22 年 2 月 5～6 日に開催された第 15 回全国回復期リハ協議会研究大会に参加してきました。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ソーシャルワーカー、看護師、医師などの回復期リハビリテーションにかかわる職種が全国から 1,511 名参加し、一般発表演題 384 題、その他多数の基調講演やシンポジウムが行われました。当院からは私を含めリハビリテーション部の 3 名が口述発表を行い、同じくリハビリテーション部の湊部長が座長を務めました。その中で私が発表した演題「当院における回復期脳卒中片麻痺患者の歩行自立判定因子の分析～どのレベルに達したら病棟内歩行フリーとするか～」が「心に残る演題賞」に選ばれ、表彰を受けました。

私は回復期リハ病棟で理学療法士として勤務する中で、どうしたら早く・安全に対象者の歩行が自立するか考えてきました。この自立判定を一步間違えば転倒事故のリスクが伴います。しかし慎重になりすぎれば対象者の活動性と自由を奪うこととなります。よって、今回私は過去 1 年分の対象者のデータを調査し、何を基準に対象者の歩行を自立と判定したのか、アンケート調査による主観的評価指標と、身体機能や認知機能に関する客観的な実測値データを照らし合わせました。そして、何がどうなれば歩行自立と判定して良いのかを検討し、その結果を発表してきました。私の生まれ育った町静岡でこのような賞をいただけることに大変感謝するとともに、今後の臨床に生かせるよう更に追試を行っていきたいと思います。

そしてその 3 ヶ月後、平成 22 年 5 月 27～29 日に岐阜で開催された、第 45 回日本理学療法学会大会に身の引き締まる思いで参加してきました。そこでは昨年に本学会で発表した演題「片麻痺患者の座位からの歩き始め動作における姿勢制御（第 3 報）～なぜ片麻痺患者は立ってすぐに歩きだせないのか～」が選考の結果「大会奨励賞」に選ばれ、今回表彰を受けてきました。日本理学療法学会大会は理学療法士が参加する日本最大規模の学会で、毎年一般演題発表 1,700 題程度と、多くの基調講演が行われます。3 年かけて取り組んできたテーマが認められたことは大変光栄なことです。

今年は上記二つのありがたい賞をいただいたことを、対象者様や湊部長をはじめとする研究協力者に感謝し、今後全世界の脳卒中リハビリテーションに情報発信し、大いに貢献できるよう、英文での論文文化に励みたいと思います。

(文責：リハビリテーション部 理学療法士 ^{おさだ} 長田悠路)



(左より、湊部長、筆者、涌野、澤田)



(筆者)

患者さんの権利宣言

当院はつぎにあげる患者さんの権利を尊重した医療を行います

安全で良心的な一貫した医療を受ける権利

個人の尊厳とプライバシーを守る権利

自らのことを知り、説明を受ける権利また苦情を申し立てる権利

医療機関あるいは医療行為を選択・決定し、あるいは拒否する権利

患者さんの日常生活に配慮した医療を受ける権利

医療法人社団三光会 誠愛リハビリテーション病院

猛暑が続いた夏もそろそろ過ぎようとしています。当院の新託児所はいかがでしょうか？仕事も子育ても頑張る事ができる職場作りに今後も励み、よりよい広報活動に取り組んで参りたいと考えています。今後とも宜しくお願い致します。

発行：医療法人社団三光会

誠愛リハビリテーション病院

編集：広報委員会

平成 21 年 9 月 1 日発行